

# 事態に対する評価を述べるコトダ構文の分析

## ——コト節による Common Ground 更新の回避——

田 村 早 苗

# 事態に対する評価を述べるコトダ構文の分析

## ——コト節による Common Ground 更新の回避——

田村 早苗  
Sanae TAMURA

### 目次

1. はじめに
2. 議論の対象としないデータ
  - 2.1 価値判断のコトダ
  - 2.2 感嘆のコト
  - 2.3 主語名詞を説明するコトダ
3. 先行研究
4. 事態評価のコトダの特徴
  - 4.1 事態に対する発話時の評価
  - 4.2 scalerな要素の要求
  - 4.3 眼前描写・情意表出の制限
5. 分析
  - 5.1 形式名詞コト
  - 5.2 Common Groundと Public Belief
  - 5.3 scaler 述語と主観性・相対性
  - 5.4 眼前描写・情意表出への制限
6. コトダロウ構文への適用
  - 6.1 推量用法のコトダロウ
  - 6.2 確認要求用法の不在
7. まとめ

### [Abstract]

*Koto-clauses evade updating Common Ground: A semantic analysis of exclamative-like "koto-da" in Japanese*

This paper describes the functional and semantic characteristics of Japanese constructions with *koto-da*, such as *Renzitu yoku huru koto-da* 'It rains a lot day after day!'. Some of the previous studies characterize this construction as the exclamative clause type since it functions similarly to other exclamative constructions like *Yoku huru koto!* On the contrary, I argue that *koto-da* should be analyzed as declarative and that the exclamative-like function of the *koto-da* construction can be explained by the semantics of the *koto*-clause. The key point of the semantics of the "P-*koto*"-clause is that it puts proposition P into Public Beliefs (Gunlogson 2002) but does not impose any bias about the truth of P in Common Ground.

### 1. はじめに

本稿では、(1)に挙げるような、現代日本語で見られる、述語部に「コト+断定詞ダ(あるいは丁寧体デス)」の付加された構文に注目する。

- (1) a. 連日よく降ることだ。  
b. (小遣いをもらえると分かったとたん手伝いを始めたのを見て)

ほんとに現金なことだ。

- c. 10歳にして大人顔負けの強さですから、将来が楽しみなことですね。  
(2) 為替は悪いなりに下げ幅が小幅だったことを好感したようだ。何とも忙しいことだ。(現代日本語書きことば均衡コーパスBCCWJより、下線筆者<sup>(注1)</sup>)

このような構文は単なる事態の叙述ではな

キーワード：感嘆用法、評価、句タイプ、コトダ、意味論

Key words: Exclamative Use, Evaluation, Clause Type, *Koto-da*, Semantics

く感動や感嘆を表す機能を持つと指摘される。例えば、益岡・田窪 (1992) は (3) を「感動文」の一例として挙げている。また、益岡 (1991) は表現類型のモダリティの一種である「感嘆型」を「詠嘆系の感嘆型」と「驚嘆系の感嘆型」に分類しているが、驚嘆系の感嘆型モダリティの例として挙げられているものの中に (4) のような例も含まれている。

- (3) よく間に合ったことだ。  
(益岡・田窪 1992 : p.176 (8) による)
- (4) よくけがをしなかったことだ。  
(益岡 1991 : p.89 (63) による)

ただし、感嘆文の典型例とされるのは (5) や (6) のような、喚体の文 (山田 1908, 尾上 1979 ほか) や未分化文 (益岡 1991, 安達 2002 ほか) と呼ばれるタイプの構文である。

- (5) 美しい花!
- (6) この旋律の美しいこと!

これらの構文と比べると、本稿で扱う「コト+ダ」の構文は主語—述語の関係が成り立っている分化文であること、格助詞が現れること等の特徴がみられる。そのため、(1)–(4) のような文を感嘆文という叙法形式に入れることについては議論の余地がある。益岡 (1991) は前述のとおり「コト+ダ」を用いた構文を感嘆文の一部に含めているが、「[未分化文による感嘆表現—詠嘆系の分化文—驚嘆系の分化文] という順の、感嘆文らしさの序列とでもいうべきものを設けることができるわけである」(同 : p.89) と述べ、「感嘆型」と話し手の知識を聞き手に伝達する「演述型」の中間に位置づけている。

このような位置づけがなされる一因として、益岡による表現類型のモダリティの分類が、文の機能に基づく部分が大きいことが挙げられる。しかし、感嘆文や命令文のような

句タイプ (clause type) を分類するうえで機能という基準は絶対ではない。機能を基準として重視しすぎると、形式の面で雑多なものが同一の句タイプに入ったり、逆に形式面で同一の構文と認めたいようなものが様々な機能を持ったりするなどの問題が生じる<sup>(注2)</sup>。

それでは、「コト+ダ。」という形式を持ち、感動や感嘆とも呼べるような「事態に対して評価を下す」機能を持つ (1)–(4) の構文 (以下、「事態評価のコトダ文」と呼ぶ) はどのように分析するのが妥当だろうか。本論文では、事態評価のコトダ文を平叙文と分析する。そのうえで、この構文の機能が「感心」などの事態評価に限定されることは、コトダの意味論から説明可能と主張する。具体的には、コトの意味論として (7) を提案する。

- (7)  $[[p\text{-コトダ}]] = \lambda p. \lambda C. (PB_{\text{spr}}(C) + p)$   
ただし、mutual assumption から  $\neg p$   
は取り除かれない。

## 2. 議論の対象としないデータ

事態評価のコトダ文の特徴や先行研究の分析を整理する前に、本論文で対象とするデータの範囲について説明しておく必要がある。類似した形式や機能を持つ構文の中で、以下のようなものは「事態評価のコトダ文」と異なる性質を持つため議論の対象としない。

- (8) a. 価値判断 (助言, 忠告など) を表す「~コトダ。」  
b. 感嘆を表す「~コト。」  
c. 「~/ノ/コトハ…コトダ」  
d. 主語名詞の内容を述べるコトダ

次節以降、(8a-d) の各構文と、事態評価のコトダ文との性質の違いについて整理する。

## 2.1 価値判断のコトダ

「～コトダ」という形式には、未実現の事態に対する価値判断を表すモダリティ表現としての用法がある（益岡1991, 森田2000, Cf. 高梨2010<sup>(注3)</sup>）。Portner（2009）の用語に従うならばpriority modalityのカテゴリーに属する表現である。このようなコトダ構文の代表的な機能は、聞き手に対する助言や忠告である。

- (9) 暗くならないうちに帰ることだ。  
 (10) そういう場合、人類学の調査をやる前に、まず、総督に娘がいるかどうかを調べることだね。  
 （高梨2010：p.119（36）より抜粋）  
 (11) 家族が大切ならば今すぐやめることです。 （BCCWJ）

価値判断のコトダについては、本稿で提示する事態評価のコトダの分析を拡張して扱える可能性がある。しかし、紙幅の都合上本稿では議論の対象としない。

## 2.2 感嘆のコト

感嘆文の一種とされるものに、以下のような「コト」で終わる文がある（安達2002, 日本語記述文法研究会編2003）。この構文では、コトに断定詞ダが後接しない。

- (12) この作品の面白いこと！ ぜひ読んでらいいよ。 （記述研2003<sup>(注4)</sup>：p.84）  
 (13) […] それにしてもポカに気付いた後の夕食の不味いことよ。  
 （安達2002：p.111, (13)）

この構文では、属格の「の」という助詞が「面白い」や「不味い」の項に付いている。特に(12)では「の」を「が」や「は」に変えると容認度が下がる。つまり、「この作品」や「夕食」は名詞コトの修飾要素となっていると考

えられる。このような助詞「の」を含む例を事態評価のコトダ文で表すことはできない。

一方、感嘆のコトには終助詞化した用法も存在し、女性のことばとされる（記述研2003：p.85）。終助詞化したコトを用いる場合、助詞「は」が出現する、丁寧体に後接しうるなどの特徴がみられる。

- (14) この子は元気だこと！  
 （記述研2003：p.85）  
 (15) よくまあ、器用に変えられますこと。  
 （BCCWJ）

丁寧体への後接、女性的表現という印象などは事態評価のコトダ文には見られない。

## 2.3 主語名詞を説明するコトダ

事態評価のコトダ文の特徴を整理するうえで紛らわしいデータとして、前述（8c, d）のような、「～ノハ…コトダ」「～コトハ…コトダ」「主語名詞（句）+ハ…コトダ」などの文がある。

- (16) a. 努力が認められたのは喜ばしいことだ。  
 b. 重要なことは、メンバー間で目標を共有することだ。  
 c. 高校時代の思い出は、よく友達と教室で好きな音楽を聴いたことだ。

これらの文では、コトダにタを後接させることが可能である（17a）。一方、事態評価のコトダ文にはタが後接できない（17b）。

- (17) a. 努力が認められたのは喜ばしいことだった。  
 b. ??連日よく降ることだった。

事態評価のコトダ文を分析する際には、(8c, d) に属するデータとの切り分けが重要になる。(8c, d) のような文は、事態評価のコトダ文と明確に区別することが難しい場合もあるためだ。特に、主語名詞句が省略された際には、形の上ではどちらか区別ができないこともあり得る。たとえば、(18) の 2 文目は事態評価のコトダ文でもあり得るが、主語名詞句 (= 「努力が認められたのは」) が省略された文でもあり得る。

(18) 努力が認められた。喜ばしいことだ。

事態評価のコトダ文の特徴を適切に取り出すためには、主語名詞を説明するコトダではありえない用例に注目して検討する必要がある。

本節では、事態評価のコトダを分析するにあたって、議論の対象としないデータについて予備説明を行った。次節以降、事態評価のコトダの分析を進める。

### 3. 先行研究

まず、事態評価のコトダが先行研究においてどのように位置づけられているかを簡単にまとめる。

前述のとおり、益岡 (1991) や益岡・田窪 (1992) は感嘆型／感動文の一種として、本稿で事態評価のコトダと呼ぶ文を挙げているが、詳細な特徴の議論はなされていない。一方、日本語記述文法研究会編 (2003) ではこの構文は、ノダ・ワケダ、およびモノダとまとめて「説明のモダリティ」に含まれている (同：5 章)。コトダは「助言・忠告を表す用法」と「感心・あきれの用法」 (= 本稿の用語でいう「事態評価のモダリティ」) の 2 つに分けられており、どちらも説明のモダリティに含まれている。この点で、記述研 (2003) はコトダについては形式を基準とし

た分類を行っていると言える。

記述研 (2003) も事態評価のコトダについては少量の記述にとどまっている。コトダの接続については、「動詞の過去形・非過去形、イ形容詞の非過去形、ナ形容詞の語幹 + 「な」に接続するが、よく用いられる形容詞は限られている」(p.227) と述べられている。さらに、「ことだった」という形をとらない (前述 (17b) も参照)、「あきれ」の意味合いがモノダより強く、マイナス評価や皮肉を表しやすいと指摘されている。

(19) a. よく、こんなにたくさん集めたことだ／ものだ。

b. まったく世話の焼けることだ。

(記述研 2003 : 227)

この記述にもある通り、事態評価のコトダは形式上様々な品詞につきうが、実際にどの語と共起できるかには制限が多い。次節では、主に意味的な側面から事態評価のコトダの特徴を整理してゆく。

### 4. 事態評価のコトダの特徴

本節では、事態評価のコトダについて、形式の特徴、共起する述語の意味的特徴や使用文脈の制限などを整理する。

#### 4.1 事態に対する発話時の評価

まず第 1 の特徴は (20) である。

(20) 事態評価のコトダは、特定の事態に対する、発話時の話し手の判断を表す。

この特徴付けが適切であることを示すデータを順に確かめていこう。まず第 1 に、コトダが発話時の話し手の判断を表すことは、前述したとおり、事態評価のコトダにタが後接しない事実から示唆される。加えて、事態評

価のコトダは長期知識に入っている知識を伝達する際には使えない。(21)はこの点を示す例である。

(21)??10年前この大会に参加したチームは  
少なかったことだ。

益岡(1991)や森山(2000)は平叙文の表す断定のあり方を、「認識・意見」と「知識伝達・事実報告」に分けているが、事態評価のコトダは発話時における「認識・意見」の表明と特徴付けられる。

第2に、コトダが特定の事態に対する判断を表すという根拠を挙げる。そのために、性質を表す述語に関するindividual-level/stage-levelの区別に注目しよう。コトダ文はindividual-levelの述語とは共起しにくい。(22)の容認度は高くないし、(23)は単に一般的な土地の特質を述べる文脈では不自然になる。

(22)??娘はかわいいことだ。

(23) (世界の各地方の雨量グラフを比べて)  
??この地方は雨がよく降ることだ。

同じ「かわいい」や「よく雨が降る」のような述語でも、特定の事態に基づいて述べられる場合には容認可能である。

(24) (自分の姿を見つけたとたん娘が駆け寄ってくるのを見て)いつもながら、娘はかわいいことだ。

(25) (1週間の滞在中5日目までずっと雨が降っていた。6日目も雨が降っているのを見ながら)  
この地方は雨がよく降ることだ。

(26)のような文を文脈についての前提知識なしに与えられた場合もやはり、話し手が「マリが優しい」ということを何らかの事態の体

験に基づいて述べていると解釈される。

(26) マリはほんとに優しいことだ。

以上より、事態評価のコトダ文は「特定事態に対する」「発話時の話し手の判断」を表明するとまとめられる。

#### 4.2 scalerな要素の要求

第2の特徴は、事態評価のコトダ文と共起可能な述部の意味に関する(27)である。

(27) 事態評価のコトダは、scalerな要素が含まれない述語部と共起しにくい。

この点については、動詞にコトダが後接する例で確かめることができる。動詞にコトダが後接する場合、「よく」などのscalerな意味を持つ副詞が共起する 경우가多く、scalerな要素がないと容認されない(28b)。ただし、副詞以外でもscalerな要素が含まれれば容認可能となる(28c)。

(28) a. 雨がよく降ることだ。  
b.\*雨が降ることだ。  
c. ひどい雨が降ることだ。

#### 4.3 眼前描写・情意表出の制限

最後に指摘するのは、(29)の特徴である。

(29) 以下の場合、事態評価のコトダ文は不自然になる  
a. 眼前事態を単に描写する場合  
b. 話し手の感情・感覚を単に述べる場合

2つの特徴付けの根拠となる例を順に挙げる。まず、(29a)の根拠となる例を見よう。

- (30) a. (東京スカイツリーが視界に入っ  
てきて) うわあ, {高いね! / ??  
高いことだね!}
- b. (パンダの子どもが走ってくるの  
を見て) うわあ, {かわいい! / ??  
かわいいことだ!}
- c. (パンダの子どもが走りまわるの  
を見て) よく {走るね。 / #走る  
ことだね。}

「感心」を表しつつ眼前事態描写をしている例ではあるが、(30)においてコトダを付加した例は不自然になる。ただし、(30c)については、長時間走り回るのを見ていた後に、感心する気持ちに重点を置いて述べるのであれば、コトダを伴う例も自然になる。

次に、感覚・感情の表出に関する(29b)の特徴について確かめる。(31a)と(31b)の対比が示すとおり、単に話し手の感覚・感情を表出する場合、事態評価のコトダは使用しにくい。

- (31) a. どんどんサーブが上手になってきた! 楽しい!
- b. どんどんサーブが上手になってきた! ??楽しいことだ!

本節では、事態評価のコトダ文の特徴として以下の3つを提示した。

- (20) 事態評価のコトダは、特定の事態に対する、発話時の話し手の判断を表す。
- (27) 事態評価のコトダは、scalerな要素が含まれない述語部と共起しにくい。
- (29) 以下の場合、事態評価のコトダ文は不自然になる
- a. 眼前事態を単に描写する場合
- b. 話し手の感情・感覚を単に述べる場合

次節では、これらの特徴を説明できる形で

事態評価のコトダ文の意味論的分析を行う。

## 5. 分析

本節では、前節で示した3つの特徴を説明できるコトダ文の分析を提案する。具体的には、まず(20)の特徴について「事態」を表すという形式名詞コトの意味に基づいて説明する。一方で、(27)と(29)の特徴については、コト節のCommon Ground (Stalnaker 1978)に対する更新操作について特殊な規定を置くことで説明できると主張する。

### 5.1 形式名詞コト

コトダ文が特定の事態に対する発話時の話し手の判断を表すという特徴は、形式名詞コトの特徴、および「ジョンだ」「学生だ」のような名詞文を、個体を表す名詞から「節- {ノ/コト/…}ダ」のような名詞文へと拡張した(コト拡張: 益岡2007)結果から自然に説明できる。

「ジョンだ」「学生だ」のような顕在的な主題を持たない名詞述語文は、発話文脈に「ジョン」という個体や「学生」という性質をもつ個体が存在する、というのが最も自然な解釈である。これを「P (=節)- {ノ/コト/…}ダ」という名詞文に拡張すると、発話文脈にPという性質を満たす事態/事実/判断/発話…などが存在するという解釈が得られる。

ノダ文の場合はノに関する意味論的な規定が少ないため、発話文脈におけるPという判断の存在(→推論「雨が降ったんだ」)や、Pという発話の存在(→あいづち「東京へ行ったよ」「へえ、東京行ったんだ」といった様々な解釈を受けうる。一方で、形式名詞コトに「事態」という意味論的な規定があるため、発話文脈にPという性質を持つ「事態」が存在するという意味になり、(20)の特徴が導かれると考えられる。

## 5.2 Common GroundとPublic Belief

次に、(27)と(29)の特徴をふまえて、発話における情報のやりとりの側面に注目してコトダ文の意味論的分析を進める。分析においては、Common Ground (Stalnaker 1978)とPublic Belief (Gunlogson 2002)という2種類の情報領域を区別する枠組みを採用する<sup>(注5)</sup>。

2種類の情報領域のうち、一般的に用いられているのはCommon Ground (共通基盤)である。これは、「談話参加者の相互知識であるような命題の集合」と定義される。談話の進行中、ある発話によってCommon Groundに命題が加えられるなどの変化が生じることもある。

ここでいったん、Common Groundを用いた文の意味の記述の例を見てみよう。意味の形式化には、更新意味論 (Heim 1982)の枠組みを用いる。Heim (1982)は、文の意味をそれが発話された時に文脈に生じうる変化 (context change potential: ccp)として分析する。例えば、談話において(32)が発話され、談話参加者から不同意や疑念が表明されることがなければ、Common Groundには「2019年5月7日の天気は晴れだ」という命題が加えられることになる。

(32) 2019年5月7日の天気は晴れだ。

このような文脈に与えうる変化をふまえると、(32)の意味論は次のように表される。

(33) [[2019年5月7日の天気は晴れだ。]]  
=  $\lambda C. (CG(C) +$   
2019年5月7日の天気は晴れだ)

ここで、表記法について注記を述べる。Cは発話文脈をとる変項である。命題は太字で書きあらわす。「CG(C) + p」とは、発話文脈CにおけるCommon Groundに命題pを加

えることを表す。

Gunlogson (2002)はCommon Groundに加えてPublic Beliefs/Discourse Commitmentsという概念も用いることで、枠組みを精緻化している。Public Beliefs/Discourse Commitmentsは「各談話参加者について、その談話参加者が信じていることが公に認識されている命題の集合」と定義される。これはCommon Groundとは異なる集合であり、Public Beliefに命題pが加えられる更新が生じたとしても、それがCommon Groundに命題pを加える更新を引き起こすとは限らない。これによって、「相互知識として「pである」という情報を持ってはいないが、「pである」が真だというバイアスを話し手は持っている」というような文脈の情報を捉えることが可能になる。

多くの場合、(32)のような通常の平叙文が発話される場合には、Public Beliefが更新されることにより、Common Groundにも影響が与えられる。たとえばGunlogson(2001: 36)は次のように述べている。

(34) The use of either a rising or a falling declarative expressing p ensures that the context is one in which the participants cannot easily come to agreement on  $\neg p$ . By committing one participant to p, the declarative rules out  $\neg p$  as a mutual assumption, effectively conveying a bias toward p. (Gunlogson 2001: 36)

この枠組みを用いて、事態評価のコトダ文の意味論として(35)を提案する。

(35) [[p-コトダ]] =  $\lambda p. \lambda C. (PB_{\text{spkr}}(C) + p)$   
ただし、mutual assumptionから $\neg p$ は取り除かれない。



ここで鍵となるのは、下線を引いた但し書き部分である。これにより、「p-コトダ」という発話による文脈更新がなされた後でも、話し手は(自分の信念として「pである」という命題を表明しているが)、なお「pである／pでない」という相互理解について中立的である、ということが示される。

しかし、これは奇妙な状況に感じられる。「2019年5月7日の天気は晴れだ」のような命題であれば、この命題を信念として保持しつつ、談話参与者との相互理解構築においてこの命題の真偽について中立的であるというのは難しい。これは、Gunlogsonが(34)で述べているとおりである。だが、Scaler 述語を含む命題の場合には、このような不整合を生じさせずに文脈を更新することが可能になるというのが筆者の提案のポイントである。

### 5.3 scaler 述語と主観性・相対性

前節で述べたとおり、筆者は、scaler 述語の場合については、pをPublic Beliefs/Discourse Commitmentsに含みつつ、Common Groundに $p/\neg p$ のどちらが加えられるかについては中立的、という話し手の態度が成り立ちうると主張する。これを可能にするのが、scaler 述語の主観性・相対性という特徴である(Kennedy 2013, Lasersohn 2017, Cf. Stephenson 2007)。

scaler 述語は一般的に文脈依存的であると言われる。たとえば「背が高い」のような scaler 述語を考える時、「どのような集合の中で考えるか」(comparison class) および「背が高いと高くないの境界をどこに置くか」(cut-off) に応じて、「マリは背が高い」のような文の真偽が変化しうる(Lasersohn 2017)。例えば、マリが小学3年生だとして、小学3年生の集団という comparison class では「マリは背が高い」が真だが、マリの家族と比べると偽になるということがあり得

る。また、同じ comparison class でも「背が高い／高くない」を分ける境界が変わることはある。

このような文脈に依存して決められる要素について、さらに「人ごとに基準が異なる」という場合も考えられる。分かりやすい例として、Lasersohn (2017) の挙げる形容詞 rich を用いた文で考えてみよう。

(36) Mary is rich.

(Lasersohn 2017 : p.229, (260))

この文について、rich が主観的な述語として解釈されると、文の真偽を判断する基準について人ごとに異なるものを用いることになる。このとき、例えばジョンは(36)を真、ピーターは偽と考えるかもしれない。しかし、真偽についての判断は違えど、2人のどちらかの判断が間違っていると決めることはできない。このような現象は faultless disagreement と呼ばれる。

事態評価のコトダ文を使用する際には、話し手はこのような faultless disagreement の可能性を想定している、というのが筆者の主張である。そのため、コトダ文が容認可能となるためには scaler 述語、しかも主観的なものとの共起が必要条件となる。その結果、事態評価のコトダ文は、話し手が主観的な評価を述べている場合だけ容認可能になる。機能面から言えば、「感心」「感嘆」だけに限られることになる。これにより、事態評価のコトダ文が平叙文でありながら感嘆の機能を持つという特徴が説明できる。

### 5.4 眼前描写・情意表明への制限

前節で提案した意味論に基づいて、(29)の2つの特徴も説明が可能である。

まず、単なる眼前事態の描写の場合、発話文脈に描写される対象の事態が存在し、それに関する明らかな情報を話し手は述べている

と解釈される。この場合、発話によって述べられた内容は即座に Common Ground に付け加えられる、あるいは自明な相互知識として既に Common Ground 中に存在するため、事態評価のコトダ文が要求する「mutual assumption から  $\neg p$  を取り除かない」という条件が満たされうることはない。よって、このような場合にコトダ文は使用できない。

次に、話し手の情意表明の場合である。「楽しい」のような述語も主観的述語であるが、話し手の情意表明として用いられた場合には faultless disagreement を引き起こし得ない。なぜなら、ある主体の情意（感情・感覚）の真偽は、その主体の視点からのみ決定可能であり、他者からは真偽を決めることが不可能だからである。よって、この場合も「楽しいな。」のような文が発された場合には即座に「話し手は楽しい」という命題が Common Ground に付け加えられることになる。よって、この場合にもコトダ文は使用不可である。

以上、本節では、事態評価のコトダ文の意味論について筆者の提案を示し、それに基づいて4節で挙げたコトダ文の特徴が説明できることを論じた。鍵となるのは、「p-コトダ」という文が p を Public Belief に加えつつ、mutual assumption から  $\neg p$  を除外しない、すなわち p の真偽についてバイアスを持たないことを示す、という分析であった。

次節では、「p-コト(ダ)」が p の真偽について中立的であり、Common Ground に p を加えるか否かの判断にバイアスを持っていないという分析を拡張することで、推論を表す「コトダロウ」という構文も分析できることを示す。

## 6. コトダロウ構文への適用

本節では、前節でしめした事態評価のコトダ文の分析を、「～コトダロウ。」という形式

を持つ文に適用する。まず必要な修正として、前節の意味論を、「コトダ。」や「コトダロウ。」のような「判断」に関わる意味レベルで用いられる「p-コト」節一般に広げて以下のとおり規定しなおす。

- (37) コトダ／コトダロウ構文において：  
 $[[p\text{-コト}]] = \lambda p. \lambda C. (PB_{\text{spkr}}(C) + p)$   
ただし、mutual assumption から  $\neg p$  は取り除かれない。

この意味論に基づいて、「～コトダロウ」の特徴を説明していく。

### 6.1 推量用法のコトダロウ

推量用法の「コトダロウ」構文については、初山(1995)や安達(1998)、益岡(2007: 2章)などにおいて、コトの有無と意味、機能の差の関係が論じられている。取り上げられている例は以下のようなものである。

- (38) 投手に打たれて無死一、二塁のピンチを背負った形なら、広島ベンチは浮足立ち、ますます流れは巨人に傾いて、その後の展開は大きく変わったことだろう。(益岡2007: p.29, (1))
- (39) それぞれの胸の中には、あの入道雲のように様々な想いや期待がもり上がっていたことだろう。(益岡2007: p.29, (2))

この構文について、先行研究の分析の方向はおおむね一致していると考えられる。安達(1998)は「ダロウ」の前に「コト」が介在しうる場合と介在しえない場合を整理している。それによると、「コトダロウ」が使用されるのは「心理・感情に言及する場合」と「条件文の後件」の2つである。これは上記の例(39)と(38)にそれぞれ対応する。この2つの場合を一般化して、安達(1998)は「事

態の真偽が話し手にとって接近不可能」と一般化している。また、益岡 (2007) は推量用法の「p-コトダロウ」文について、pの非現実性が示されていると主張している。

ただし、「条件文の後件」の例については、もう少し広くとらえる必要がある。言語形式として明示的に条件節が存在しなくても、演繹推論の結論pをのべる場合は一般的に「p-コトダロウ」が使用可能である。

- (40) (恋人と別れて3年が経った)  
彼はきっともう結婚していることだろう。

このようなコトダロウ構文を分析するには、ダロウの特異性に注目する必要がある。ダロウはニチガイナイやハズダ、カモシレナイと合わせて認識モダリティ表現とまとめられることも多いが、タが後接しない、疑問文でも使えるなど、他の表現とは異なる性質がある。このような点に基づいて、ダロウを認識モダリティに含めない先行研究も多い(森山2000, Hara2018ほか)。本稿では森山(2000)に従い、ダロウは「判断形成過程」であり、確定的な結論に至っていないことを示すと考える。

これにより、推論用法のコトダロウが可能になる場合が説明可能である。判断形成過程ということは、Common Groundの更新にはまだ至っていないという段階と分析できる。演繹推論から得られた情報や他者の信条のように、発話文脈で入手できる現実の事態が手掛かりとならない場合は、当該の命題をCommon Groundに追加するか否かについては情報がない段階である。よって、コト節を含むコトダロウ文も使用可能と予測できる。

## 6.2 確認要求用法の不在

コトの有無によって生じる明確な違いとして、ダロウには確認要求の用法があるが、コ

トダロウにはないことが挙げられる(昀山1995, 安達1998)。

- (41) あそこに信号が見える { $\phi$ / $*$ こと} でしょ?そこを右に入って下さい。  
(安達1998: 208, (21))

この事実も、(37)の意味論からストレートに説明される。「p-ダロウ」が確認要求用法として解釈されるのは、話し手が命題pについて「真である」というバイアスを持っている場合である。この場合、mutual assumptionからは $\neg p$ が除かれた状態になっている。これは(37)の条件を満たさない文脈であるため、コトダロウは確認要求の場面では用いることができない。

## 7. まとめ

以上、本稿では事態評価のコトダの機能が「感心」などの主観性の高い事態評価に限られるという事実を、コト節の意味論に基づいて説明した。コトダ/コトダロウなどにあられるコト節については、(37)のような意味論を提案した。

- (37) コトダ/コトダロウ構文において：  
[[p-コト]] =  $\lambda p. \lambda C. (PB_{\text{spkr}}(C) + p)$   
ただし、mutual assumptionから $\neg p$ は取り除かれない。

コトのような形式名詞は使用範囲が広く、意味論的にどのように分析すべきかについては残された問題が多い。本稿では議論することができなかった価値判断のコトダ文や、コトを含むその他の表現なども含めて、さらに検討を進めていく必要がある。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費JP16K16827の助成を受けたものです(2016~2018年度)。

## 〔注〕

- (1) 日本語書きことば均衡コーパスの用例に基づく。下線は筆者により付与。以下、同様の用例出典はBCCWJと表記する。
- (2) このような句タイプ (clause type) 分類に関する問題は、例えばM. Kaufmann (2011)の命令文に関する議論等を参照。
- (3) 高梨(2010)では本節で取り上げた価値判断の命令や意志、勧誘などの機能を持つモダリティ表現をまとめて「評価のモダリティ」と呼んでいる。ただし、「評価」のモダリティという用語の指す範囲は先行研究の間で食い違いが見られるため、注意が必要である。
- (4) 紙幅の節約のため、日本語記述文法研究会編(2003)を一部箇所で「記述研(2003)」と表記する。
- (5) この枠組みを用いた日本語の分析例としては、Hara & Kinuhata (2012)による大阪方言のネン(例:「明日東京行くねん。」)の分析が挙げられる。

## 〔参考文献〕

- 安達太郎(1998)「認知的意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育』8, 203-217.
- 安達太郎(2002)「現代日本語の感嘆文をめぐって」『広島女子大学国際文化学部紀要』10, 107-120.
- Gunlogson, C. (2001) *True to Form: Dising and Falling Declaratives as Questions in English*, PhD thesis, UCSC.
- Hara, Y. and Kinuhata, T. (2012) *Osaka Japanese Nen: One-sided Public Belief and Paratactic Association*, *Sprache und Datenverarbeitung*, 49-70.
- Hara, Y. (2018) *Daroo as an entertain modal: an inquisitive approach*. In Shinichiro Fukuda, Mary Shin Kim, Mee-Jeong Park, and Haruko Minegishi Cook, editors, *Japanese/Korean Linguistics*, 25. CSLI Publications
- Heim, I. (1982) *The semantics of definite and indefinite noun phrases*, dissertation,

- University of Massachussets, Amherst.
- Kaufmann, M. (2011) *Interpreting Imperatives*, Berlin: Springer.
- Kennedy, C. (2013) *Two Sources of Subjectivity: Qualitative Assessment and Dimensional Uncertainty*, *Inquiry*, 56 (2-3), 258-277.
- Lasershon, P. (2017) *Subjectivity and Perspective in Truth-Theoretic Semantics*, Oxford U Press.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』東京:くろしお出版.
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』東京:くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』東京:くろしお出版.
- 初山洋介(1995)「文末の「コトダロウ」における「コト」の意味分析」『日本語論究4 言語の変容』東京:明治書院, pp. 115-132.
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』東京:岩波書店, pp. 3-78.
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』東京:くろしお出版.
- 尾上圭介(1979)「そこにすわる!」『月刊言語』8 (5), 20-24.
- Portner, P. (2009) *Modality*, Oxford U Press.
- Stalnaker, D. *Assertion*. In Peter Cole (ed.), *Syntax and semantics, volume. 9: Pragmatics*, 315-332. New York: Academic Press.
- Stephenson, C. T. (2007) *Towards a Theory of Subjective Meaning*, PhD thesis, MIT.
- 高梨信乃(2010)『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』東京:くろしお出版.
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館.